

---

# THE TEAM！（番外編）～翡翠誘拐事件！？～

緒俐

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

THE TEAM！（番外編）～翡翠誘拐事件！～

### 【Nコード】

N3093F

### 【作者名】

緒俐

### 【あらすじ】

風野翡翠、美原紫織、山岡優奈の三人は楽しく街に繰り出すものの、毎回ナンパされるためにうんざりしていた。しかし、アートの女王こと紫織の脅迫でたいていは退けていたのだが、いきなり翡翠の姿が消えてしまい……

## 第一話：ナンパにはご用心

風野翡翠、美原紫織、山岡優奈の三人で街に繰り出せば、やはりナンパはつきものだと思えるしかない。

「君達可愛いねえ。箒星の生徒？」

今日何度目のナンパかわからない。

しかし、紫織は可愛い友人を守るために軽くあしらった。

「そうよ。箒星学院の出身でTEAMのバスターなの。」

だから関わらないでくれる？ 私達を狙う殺し屋もいるわけだし」

紫織の一言で青くなるナンパ男達は一目散に逃げ出した。

2

「さすが紫織！ カッコイイ！」

「ホントね。アートの女王の殺気に勝てる奴は少ないわ」

「・・・何となく嬉しくないわ」

裏返せば最強女である。

「何言ってるの。それだけ強いのに普段は白に助けられてるんですよ。」

私や翡翠から見たら凄く羨ましいわよね？」

「うん！ 白ちゃんは紫織のこと絶対守ってくれるもんね！」

紫織は心の中でつつこんだ。

「二人を守る王子様の本気も怖い」と・・・

「まあ、TEAMの名前を出せばたいい逃げてくれるわよ。  
特に翡翠は気をつけてよ？ 治療兵に怪我させると隊長が怒るか  
ら」

「大丈夫だよ！ 皆のこと信じてるからさ」

翡翠の笑顔に二人の友人達は心和むのだった。

しかし、事件はやってくるのである。

「翡翠！ どこに行ったの！」

紫織と優奈は必死になって翡翠を探して回る。

十分前にジュースを買いに行った翡翠がいきなり消えたのだ。  
どれだけ天然迷子でも、一直線の道に迷うほどの方向音痴でもな  
い。

「ダメ、携帯にも出てくれない」

優奈は何度も翡翠にかけたが、彼女は応答してくれなかった。

「・・・優奈、大地に電話して来てもらおう。

私達じゃここまでが限界なもの」

「うん！」

優奈が大地に電話をかけたその瞬間、  
鬼の隊長が優奈から携帯を奪った。

「何だ？ デートの誘いか？」

うれしそうな声が受話器を通して鬼の隊長、篠原快の耳に入る。  
だが、一瞬にして快の怒声が響いた！

「一秒で俺達のとこへ来い！  
翡翠を早く追跡しやがれ！」

それだけ伝えて快は電話を切った。

「か・・・快？」

「や・・・っぱ怒ってる・・・よね？」

恐る恐る二人は尋ねると、

「いや、お前らに怒りは感じないさ。

ただ、翡翠に何かあったらTEAMの全戦力注ぎ込んでもいいが  
な」

『マジだ・・・！！』

二人は心の底から恐怖を感じた。

「快！ 翡翠はこつちだ！」

「遅い！ さつさで行け！」

間違いなく普通は二十分かかる距離を一分弱で大地は飛んで来た  
のだろうか、

それでも快は文句を垂れる始末だった。

「分かってるよ！ バスターが数人関わってるんだ。

お前らこそ戦闘体勢に入れよ！」

街のあらゆる声を聞く能力を持つ大地は、すぐに情報を掴んでいた。

「どこの奴らか分かるか？」

「・・・掃除屋『ホーク』の連中だ」

それを聞いた三人は顔色を変えた。

## 第二話：誘拐犯はバスター

翡翠は暗い倉庫の中で目を覚ました。

急に意識が遠くなったことだけは覚えている。

そして今、自分は明らかに誘拐されてる状況にあるようだ。

「仕方ないな。このぐらいの手錠なら壊せるかな」

自分の魔力を手錠に集中させる。

そして手錠に流れきったところで気合を入れて破壊した。

「さて、とにかく紫織達が待つてるんだから帰ろ」

治療兵という立場上、いつでもどこでも逃げ切る訓練を受けて来た性が、

実に翡翠は落ち着いていた。

「そりゃ困るな。俺達の誘いを断ってもらったらよ」

「誰？」

間髪入れずに翡翠は尋ねた。

十数人に及ぶ男達は、ニヤニヤしながら翡翠を取り囲み始めた。

「今日の昼間にあっただろう？」

アートの女王に邪魔されたから覚えてないの？」

紫織の通り名を知っているということは、間違いなく彼等はバスターだ。

「あいにく覚えてないわ。私に何か用？」

翡翠は強気で出た。

逃げるルートは数本ある。おそらく快達も動いて来ると信じていたからだ。

「そうか。じゃあ、俺達が君に忘れられない思い出をプレゼントしよう。」

集団レイプって知ってる？ お姫様」

爆笑が起こる。おそらく自分を絶望の淵に追い込んでから痛ぶるタイプだ。

「知ってるよ。TEAMの任務でもよくあるもの。」

暴行を受けた女の子を救ってあげる任務がね。

だからTEAMを敵に回す恐ろしさを叩き込んであげるわ！」

翡翠はさつと構えた。

今回は闘う方をとることにしたのだ。

「へえ、治療兵なのに闘うんだ。立派な心掛けだね」

「当たり前よ！ あんた達を見逃したらうちの任務が増える！だからここで片付ける！」

しかし、翡翠からは決してつつこまない。最悪のパターンも考えるべきだからだ。

「そうかい、だがいくらTEAMの治療兵でも、例えアートの女王が来ても敵わない人数だろう？」



翡翠は愕然とした。

倉庫という場所はおくれんぼにはもってこいだ。三十人近くのバスターがいる！

「一度TEAMを敵に回してみたかったんだ。俺達『ホーク』の実力を試すためにもな！」

一斉に翡翠に襲い掛かってきたが、翡翠はするりと男達から抜け出した。

彼女の回避能力が高い事を物語っている。

「甘いな」

「なっ！」

翡翠の体はいきなり動かなくなった。

時空タイプのバスターがこの中にいたのだ。

「今だ！ 押さえろ！」

絶望が翡翠を襲った！

だが、急に三十人のバスター達の動きが止まる。

「体が！ 何だこの重さは！」

「重力よ。あなた達の動きを止めるためのね」

翡翠の顔がパツと明るくなった。

TEAMの中で重力を味方に付けるバスターは一人だけ。

「優奈！」

翡翠が見上げた天井には、四人のバスターが殺気を放って立っていた。

### 第三話：快の講義

「優奈、あと三分そいつらを止めてろ」

「お安い御用」

快は地上に飛び降りると、リーダー格の男の元へ歩み寄った。

「ホークの葛木か。最近掃除屋界でも噂になってるよ。女をとって喰う不細工がいるってな」

快は鼻で笑った。確かに、快と比較してはたいていの男子が見劣りする。

「そりやどうも。こつちにもTEAMの篠原っていう親の七光小僧がいるって噂は流れてるさ。

仲間に俺達を動けなくしてもらわなければ戦えない腰抜けとは知らなかったが」

葛木も負けじと言い返して来た。

しかし、快は挑発に乗るような隊長ではない。

「そうだな。三分といわず三時間は動けない状況にしてもいいな」

三十人の男達はぞっとした。

しかし、快は優奈に命じた。

「優奈、こいつらの重力を軽くしてやってくれ。

三十人ぐらい俺一人で十分だ」

「いいけど、援護くらいしようか？」

尋ねる必要のない質問を敢えてする。

「いや、お前ら三人で翡翠を守つとけ。

特に大地、翡翠に攻撃の一撃でも喰らわせたなら死刑だからな！」

「お前が加減しろよ……」

とは言いながら、大地は結界を張る。

おそらく倉庫の一つは簡単に破壊できるぐらい快はキレてる。そう、キレてるのだ。

「ははっ、三十人を一度に相手にするのか！」

おもしろい！ ついでにTEAMそのものをブツ潰してやるよ！」

快の身体が急に重くなる！

翡翠のように時間を操作されたからだ。

「くたばれ！ 篠原！」

男達が飛び掛かってきたが、

「召喚、切裂！！」

「うわっ！！」

男達は一斉に斬られる！ 快は一步たりとも動いてないのにだ。

「コノヤロ！」

「遅えよ」

快は葛木的首筋を叩き壁まで飛ばす。

しかし、首の骨を折らなかつたあたり、まだ優しさはあるようだ。

「時空系がいてこの程度とは情けないな。だが、教えといてやる。バスターの中で時空系に対抗する術は三通りだ。

一つは時空系タイプであること。

二つ目は術者より強者であること。

三つ目は時空魔法を使いこなせない馬鹿より早く攻撃することだ」  
「なめやがって!!」

やはりバスターなのか再度快に襲い掛かる。しかし、それは空を切るだけだった。

「やれやれ……」

そしてさらに快は力を上げていく。

その実力差はありえないものだった。

快が強すぎる事だけが事実だ。

「うちに手を出してはいけないという理由は親父だけじゃねえよ。

TEAMは掃除屋を潰す掃除屋としての力を持つてるんだ。

そして今回、お前達を潰す依頼が俺達に入って来た。

翡翠を誘拐したのは失敗だったな!!」

怒りの形相とともに、倉庫そのものが跡形もなく吹き飛んだのであった……

#### 第四話：義臣の説教

翡翠誘拐事件から一夜明けた。

TEAM本社では久しぶりの息子の説教を楽しみにしている社長が一人。

それをニコニコして見守るであろう母親も控えていた。

「さて、久しぶりの説教を始めようか」

面白さ全開モードの義臣ほどもんどくさいものはない。

自分の父親だけに性質も悪い。

「・・・悪かったよ。確かにやり過ぎたと反省してるよ」

快は素直に謝った。新聞記事のトップを飾ってしまっただけに、今回は自分の方が明らかに悪い。

「いや、翡翠を誘拐したんだ。

倉庫の破壊と全員に全治三ヶ月の骨折ぐらいは大目に見てやるさ。おかげでホークも壊滅させやすかったしな」

あくまでも義臣は結果オライ主義である。

息子の気持ちを汲んでやることは忘れない。

「だが、お前が使った召喚はいただけないな。

龍神を呼び出すような相手でもなかっただろうに」

一番突かれなかったところをクリーンヒットさせて来るのも義臣である。

龍神を使つたために、快の魔力はしばらく回復せず、ホーク壊滅の任務に参加できなかったのである。

「しかも、翡翠をホーク壊滅の任務に出す羽目にさせたのはいただけないなあ、隊長としてな」

任務を与えたのは明らかに義臣のはずなのに、全て快が悪くなるように話を持っていくのは義臣ならではの楽しみでいるあたり非常に快は気に喰わなかった。

「だったら翡翠を外せば良かっただろう。  
むしろたまには運動しろよ社長」

精一杯の抵抗がこれだと虚しくなる。  
だが母親は分かってくれていた。

「そうよね、たまにはあなたも動いた方がいいのかもね。  
社長としての示しがない上に、父親の威厳も失ったら痛いでしょう?」

「いや、俺は夢乃さんに惚れているから問題ないけどな」

これである。篠原義臣という男は妻の愛と酒さえあれば問題ないのだ。

「まっ、これに懲りたらしばらく龍神は使わないことだな。  
それと翡翠のケアは頼むぞ。誘拐されやすいのは治療兵の宿命でもあるが、

女の子として、全くショックを受けなかったわけでもないだろうからな」

確かにそれは当たっている。  
快は社長室から消えた。

「やつぱり、翡翠ちゃんをホーク壊滅任務に参加させたのは間違いだったんじゃないの？」

夢乃は義臣の判断に多少ながらの不満を持っていたが、

「確かに翡翠には気が重い任務だったと思うが、  
二人を成長させるのも社長の任務だからな」

こんな時だけはまともになる。

夢乃は心の底から義臣に恋い焦がれているのは自分だと思わされるのだった。



## 第五話：今日は良い一日

三連休とは実に有り難いものだ。

高校生バスターという立場上、休みはきっちりとらせてくれる。同じチームならなおさら、快と翡翠の休みは重なるのだった。

「久しぶりだね！ 快と遊ぶのも！」

翡翠はニツコリ笑う。

何だかんだ言っても、快と遊べるのは非常に楽しい。

翡翠が快の事が好きだと自覚する前からそれは変わらない。

「ああ、任務がない日でもなけりや遊びにも出れないしな」

少しでも照れたらさすがの翡翠でも快の気持ちに気付く可能性はあるのだろうか、

快のポーカーフェイスは天下一品である。

「だけどね、いつも快と遊んでるとナンパされることって少ないよね。」

やっぱり快は有名人だからかなあ？」

TEAMの篠原快と一緒にいて連れに声をかける勇気を持つ男がいたら、

興味津々で悪友達が絡んでくるだろう。

「どうだかな。紫織と優奈がいるから声掛けられてるだけな気がしないわけでもないが」

「ひどいなあ！ それじゃあ私に魅力がないみたいじゃない！」

「それも違うな」

「えっ？」

翡翠はドキッとした。快から憎まれ口は叩かれても、褒められることは少ない。

「お前に魅力はあるさ。治療兵だし、まあ、犯罪組織の悪女に比べたらマシな性格と顔はしてるし」

「それっていいのが悪いのか分からないけど……」

微妙な快の答えに翡翠は怒りたいのかどうか分からなくなっていた。

「良いんだよ。お前はナンパなんかされずに俺に守られてる。

治療兵が危険な目に遭う必要なんか皆無でいいんだ」

少しだけ快の歩幅が大きくなる。

おそらく照れてるのか不器用なりの優しさを見せた性だ。そんな快を見たら翡翠は嬉しくて仕方なくなってしまう。おもいつきり快の手をとって引っ張ってやるのだ。

「快！ 今日のお昼は私のおごり！

スパゲティー食べに行こう！」

「ああ、行くか」

今日は非常に良い一日になる。

普段そんなことも考えない少年は、魅力的な幼なじみに一日引っ張り回される一日でも、

そう素直に感じているのだった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3093f/>

---

THE TEAM！（番外編）～翡翠誘拐事件！？～

2010年10月13日17時57分発行